物見遍松三編 上

へ13
2901
7

門 ベ 13
號 2901
巻 7

寿老梅

美婦絲三編

加賀文庫

孤篷庵に渦象の古くより有る所なり

稲倉石司の梯取て渦かくを見る事哉ト

祭祀なかりし雲無き

嫁さるる女ハ一文を忘れぬ

用ゆ。三度の婦人ハ二枚を

昭和九
七月五日
遠藤

[illegible]

やう形なるふ是なく歌の姿なく[illegible]

[illegible]人の[illegible]遠年

[illegible]

つまでもの人の[illegible]の数[illegible]む

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]世知[illegible]男女の[illegible]

いひなる憂なる[illegible]雪の[illegible]是[illegible]

[illegible]の糸は春れぬの書[illegible]

[illegible]道形[illegible]

でも鰻の[illegible]

[illegible]の[illegible]の二[illegible]

[illegible]の風[illegible]の数

[illegible]中ふ[illegible]の道[illegible]

うぐひす鳴くなる花の人待ちもすなる
なちる春ごとにすぎゆく春のこがらしも
いとかまくまなる傍のどもの庵
屋のはをはらはらあつくしてあつくのいろ

土の栄一麓

東都

重吉

春

[illegible]や梅の花　青庵
[illegible]や梅の花　[illegible]
[illegible]梅の花　玉枝
[illegible]や梅の花　梅雪庵
[illegible]梅の花　柳雅
[illegible]や梅の花　松壇
[illegible]梅の花　吹雪葉

春色梅美婦禰巻之七　梅園英對の拾遺

江戸　烏永春水著

第十三回

変菓細工の蛇を売るみさげて判所の門ぐちを這入る婆婆　お縫ごまスリと言ふ　判所に完示笑ひて殿ぬぎの所より奥を覗く　判所の中殿様の障子を明けて　判へ　宋八ぎんろサア此方へおあがりな　宋へアイ　お縫うとうとうとうとう

うちの方へ行かうと判へて待つサ寛れ淋しくなつて
やせん時は大分早くお出でなければ行てお富さんの
帰りぢや米へ行やうとやうなせんぢ寛平
年時は余りどきまりこと お孫さんはどうして
なるまで判へて寛平さんなるまでこしやて今起
やうと米へ今起さじやてあるませんヨ。判さん
お孫さんもあんまり遅うお仕じやてるのヨ私も
丹さんで覚へあるが媚女が彩やりてお孫さんを

お富さのあるやうにして変なさるなア並大体なあつ
ちやてありませんぜ丈お孫さんが深れらしいを
なるほど ちやてあんまり媚女が可愛まるぢヨ私が
さんの異見ぢまいお変をいつと可笑けまども自
分で苦労をして覚へるあるまぢが喜うも同様の
異川て居る男をよく教して寛先をして居るのハも
乳ぶ乳るあんじやてあるませんヨお孫さんも迷て
媚女の如きまして お見なるとと身を入れる

米八が異見の言葉を判次郎八不審されば
指ばし考へて居らうしが判へ米八さんお米あら
ゐる変を言ふるが何様も私めやう不合解せ
ぬう人此身がなんぞ探ても あさと思ひて言ふな
るのうま 米へアレサお実似で色いヨあらも私が異
屋けさうふサそまもお仕の変ふ仕方も色いがみ
媚女の顔をづふ居 指ふる あをお致しやう 折角この
まれて居る 私が 媚女ふ きぬ色ひうう 何所までも

媚女のうりうして 惜まれ 客を利ふ人ちやう なうふ
色ふ。どふぞと判さんわんまう野暮ふ 指ぶけれども
世話をやうせ色のやうふしをお客んなまいナ 判へコウ米
八さんお米が見屋さと言ふうふやう まんざら
種のねく変でもやう人が何所で私が何様
ふのゴトトおしー腹を立し思入まそりの米へアレ
お米さん腹をおこじやう悪いいよ私まやうんの
係切づくでお話法をまるのお腹色んぞをあ立

おやア　分家も　話済ガ　落合ないな　判ヘナニ　腹を
言ハ　仕やせん　けまでも　男ども　分わくことを　言ハれさ
うな　ツイ　米ヘイエ　男ども　貧乏人　言ハまこと　合ないヨ　結ん
あ言ふ　言まして　ガま　今　松ガ　まる　時ハ　遠家　ハ
ゆと　十七八の　実情ハ　可愛らしい　娘ハ　めつやア
お茶　たんの　分ガ　判ヘアノ　娘の　夏を　やろう
言ハのの　入ッ　米ヘアレサ　知ってたり　居やア
ふ　分　解ヨ　判ヘナニ　あつやア　隣　裏ハ　居る　わ　サ

米ヘそれガ　ぼんして　来ると　のガエ　判ヘいま　湯の　沸ってと
言ハて　ちょと　寄りて　行ってと　のヨ　米ヘヲヤそれふ　行ん
あんなふ　ぐんで　眼の　ふちを　めくして　居ガ
ねん　判ヘエ　米ヘお　湯　しで　なんヨ　そやア　お茶　たんダ
斯う　やって　枕　枕　で　お　そ　なる　ふ　ハ　茶を　解く
ちて　女小　娘と　お　附　合じ　やア　是　非　左　右　なれ　の
ふ　理　も　なんヨ　そやア　お　茶　たんの　方　ガ　の
聞く　お　仕　でも　婦人の　方　で　やる　く　紋　ちゃア

亜ふん　うらみ　ままでも　お茶さんの　心ひろ　で
やうく　み　仕て　あい〜らうて　お亜　まるのと　又　をん
脱　物　込の　こん　気の　亜所　ひろでの　まぢぞ　お前
さんが　何所　までも　媚女が　苦労を　仕　まるのを
可愛　ある　変ごと　思ひて　お主　なれば　他女ぐ　さんと
言ひても　其方へ　心の　向く　ようんでも　ようんご
義理づくで　結ひの　こけみ　おるうでも　そうやう　當
座の　おくで　深く　形うと　思ふ　ある　お門ちやう

あり　まぢ　まんと　私　まやう　男ひ　まぢョ　何も　彼も
形　屋の　て　お主　まる　お茶　さんみ　さんな　変ん　言ふ
の　知ぐ　ごと　変を　ひん　抱で　大まみ　お世話ごと　お男ひ
ものとらん　けまども　まぢも　媚女と　お茶さんの　ものを
おのん　うふの　ものて　わう　まぢ　うふる　悪く　おもん　まぢで
お呉　んまと　いョト　深実　言葉　みあふまて　行　屋
る　米八が　異見も　まぢ　ぐ　別婦女　意も　嫌も　わう
ねいと　辰巳　見女と　かん　まぢ　けう　まれ　ども　判　ぢ　命ハ

あるひとうきゝ泉の清衣とゝ
きゝめし米八今言解くとも実情とせず
あふめと色をまぐる判へ行時よろこねへお糸の
涙切かんゝ親泉も あるひとびやせん 猶 ひとうかゝ
用ひてお糸や此糸の涙切を ふゝ仕ねへ 猶ふ仕
せうト ゆうて米八も 紙 居て 米へ 怒うおもひて
お糸ん もとつうゝ 私も 言甲斐がありてどんな
ゆう 嬉しいヨト 言ひぐら 嬉しう 一通の 手紙と 一

色の金を出して 米へ おまへ ひとう 媚女うゝ お糸さんゝ お
ゆうして 居うとゝきしうのであります ヨ 越してまト
言ひぐら 四通を見まへして 判次郎の耳へ口を寄せて
何ゝ 私語 米へ お怒うゝ ゆへ 沢も あります うゝ 今 新
でもちうと 仕ひて おあげ ゆうこへ そして 今の 沢い
手紙 ゆも 委細しく 書てあります とゝ それぢ
ちうと 顔を見せて おあげ ゆうこへヨ 判へ ムウ そゝ
ぢやア 今 新 ゆも ちうと 遊ひて お糸の 実意を

たゝして始終だゞやゝやう米へアどふぞ左様して
あげて呉んなさるんドレ宮う私きやア行きまさ
大きい おやうまいう 判へアレサきやア能ハナ今茶を
あつらへるまろと 米へ左様しちやア居まして
せんヨ 拙門の宮戸川の鰻 お客と茶屋さんと
の〻嬶女元ゞ待ちて居まして 判へエまあしやア
お客先ゝ来さのろエ 米へて お客ハ待ちて黄
つて来さのでありまスヨ 情夫とハ余程

可愛ものゞエ本〻〻〻 判へ遠ねんアラ〻〻〻 米へヲヤ
私きやア まんな乳楽な支だろう言ひて居ても
きなあひまさしやア まろうまスヨ呉ぐれ今言ふと
通り深乳ハ のゝ女用ゞヨ 判へ大丈夫サ 米へめてハ
ゆゝ乳ハ大丈夫ゞヨ 左様ゆゝ 晩ハきろと 北廓エ
ト言捨て やりと 呼びとめて 判へ米ハさん丈夫ハ
よろ〻〻ヨ 米へヲヤ丈夫ふエ 判へアレサ丹さんの
支ゞナ 米へ 嬉〻ハエ 苦〻ありさいとサ

ホ〻〻ト笑ひながら出て行く跡見送りて判次郎
溜息をホッと吐いて独言　判へ　どむの嬢も涙切
者ぞノウ　伜今見ハ行くとあるもうろ　ねんお園の
古人を深ふ　でもして居る　様子　言ふ　ちらまてトのふ
折ふし　裏口より　きの〻　婆　お茶さん　外　ぢのうん　お悪うろ
らうまト　言ふ　判　次郎の側へ居る　判へ　驚く
怖しと　お茶　先刻　うめまふ居さのう　きの〻　くろ
きうふのお話ハ　ふんなあもあで　聞ます　ふぐる

判　さんお茶さんハ行くとお男ひあるうろ　ふうるひぐ今
米八ぎんのお言ひのあやア　お茶さんと　私と　深ふ
きて　居る　様よ　おすりてお丈じやアありません　判　左
様ョさんざうるぐひを清て　お茶のうんも　ふの　ぎ
きの〻イエ　私きやア　嬉しふ　おぎる　きふ　判　左　きへ
お茶さんハ　臭ふ　ぐるひの　ぐうど　お　ぐらうぐる
米八ぎんのわく　男　きて　お見　きふ　完　早　うく
きハ　ありません　ぜ　左　様　して　見ふ　仕　きふ

変で他人の如きものくさき家
正の然う為て御呉んなさへナ新ふうちぼけの
女のいろ〳〵言ふやどぐろよく〳〵男ひばちのせ所
見せ根ごと御男ひ手ぶぞつちきの
見て御呉んなさへト御ひつあるる猴気みち
ちさきとも手言まゑ心のさけとど思ひ花ける

振う見ちや明み

第十四回

おくみ赤峯次郎へ青森より鎌倉へ帰りて後も毫東
病気を言ふて別荘へのこ在けるが父の病気の知せの
使と偶〻本宅へかへりて看病し東京の父が居中
まで知て病気の中を知せけるが捨置がたく俄の旅の
支度をもの〻拵へ書の者二人と多代を伴ひて
路をいそぎ廿四日目の夜八奥州白河の付方なる
とある宿にて青森の伯父の途中より先へ登せし

手紙の遠と遠の日数を多く蔵宿は遠国にて
拵よ異うれば何こやら案ずらるる峯次郎へ連れ来り
峯「エヽヨウ」茂助此拵るの者
人〻に問へ（手紙の名代助者の者出来分人に拵）
まで迎ひに来て伯父さんに逢ひ拵ずハ
何ぞ〻〻と但し何ぞ故障が出来ることのふつゝけ
茂「然でおざるませうろよ」峯「エモシ若旦那眠て居宿
蔵宿の婦ぢやア途中で万一遠ぐのもやア仕まひもする
左拵ヨウ何でも徒婦の盗人の拵る奴が道中に居る
ぢゃ出来ません
峯「出さうか」「然よ若旦那の
姿見が毎晩出て仕ぐること分かりまたるへ
一昨夜の暗中みな宿とて夜明方よ拵ふ
いつませうどやア御ざいません
「然サク若旦那ハお眠
くて迎ぐ御ざらうう私ども供として来て途中の
御仕ふ拵ぢやア帰りて大旦那の前へ解ど
ぜくません何でも此の若旦那晴る中ふ出かけて盗賊て逃
治ろうりで出かけやせう「アヽ〻大分法勝るものとふが

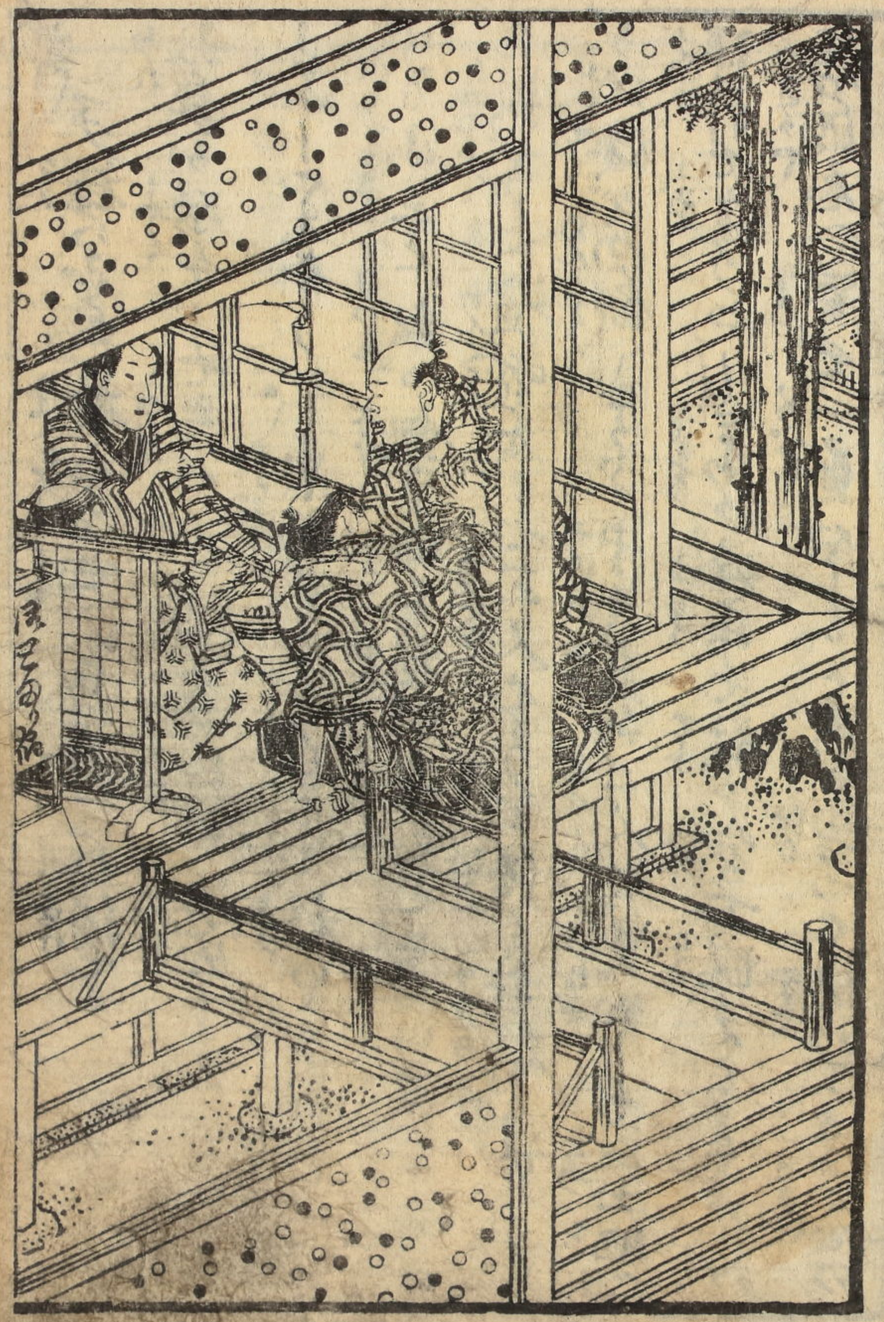
隆へ行て逃出しちやア行まへぜ ×「それぞうりがうしさ小三次さん
ぞうが為にも逃ると覚へ〳〵とおせんすせん子 ▲「イヤ逃るのハとんと言
つまるのハゼトい人ハ無へ兼て誂へる酒肴が来りしゆゑ
峯次郎の箸ひとつ気と人に酒を呑せ 峯「此身早く
起るとのもまさ初更中ハ万ずあくびらりゆるりと呑で
寝るが能じやあるまいか ×「ナニ〳〵一終夜へくるか寝るくり
ても ▲「呑方が能かろハへ〳〵 ×「ヲヤ小三次さんが逃さ出しうら
今出るけ何処の喧嘩の時に逃るクウ ×「ナニ〳〵

茂助さんそれハ捨五郎が出方顕で此処へ産まさ
うりあげ逃るさんぞこ手振る比身る私じやアおせん
ませんよ 〽「それでも今捨さんが澄人で逃さとり返さ
ものウアア〳〵〳〵 ×「ヤイ捨五郎己身が何時逃たのが
ある何程友達の言ってても小三次が逃さと言ちやア
義知しねへサア逃さ理古をやらく言ナ「アヽ〳〵手振に
立腹爲ても能やア手方ハ逃さのを言まてら然る
己身と手前と手両に逃出しそ手と向に手縦交て

流の面をして張りさるものめるぜ〳〵「空を仕きあの手方の
逃も仕さらふが仕鼻やア逃さ覚へく仕さもねくぞもをつて
張さうんぞと弟分の悪ひ何時仕鼻が誰人が張さろ
芋さ人を言て聞せや若旦那の新で手柄なるものをされ
ちやア明諸を主ねくぢやア金兵衛さねく〳〵手柄が高ろう
逃出して張りさるものを言ふ峯〳〵吏ぢやア小三や手
放ハ逃さが遠くねろ〳〵ナニ手柄な覚ハ少しもぞぜく
ません捕ぐ仮言て矢ゆ在まさアナ〳〵アハ〳〵泳く逃こ

言を言ふト矣びるぐぶ峯次郎ふむろひ〳〵モシ若旦那
か関係成て矣ぐまし〳〵小三が自文で張まさ一件な
那でぞ人さ久しひ吸ふよ私も小三も親父の新成
仕損てみ生のろ銚子の方へ漂迫まろて探びふめて
居さるものぞ人まさぞよ〳〵ナンノ吁房ぬ人夫ハ古ひるの
カア〳〵古くるて逃さが遠くねやア茂〳〵ろく小さんが
捕ハぞが若旦那と私が他して おろ仕成〳〵茂助さんが
他人のるとのと根を堀て聞さるのぞ悪ひ癖ざよへ

崇次郎伯父の
白河へ



拳「チヤ」様ちどふ捨めるの松しゝ小三八酒でも呑ぶりゝ
此身が殺をして生み「ドン」その中の逃出しゝ二件をあ出
ふーやこやう「東西〳〵」「アヽ〳〵」初のふつとみかゝ何
でも小三と私が銚子中を拵び歩行てその日暮の銚子
の如くと賓客をしゝ二三人ぢうを陰く御撰このサ夫
ゝ渡が面倒ぢゝ幸日真の二人で先出して空地へ
帰りて寄りやしゝ所ゝ途中で腹が空て堪えらまるひゝ
居酒屋へ寄て一盃やゝうちよと思つて休ひとる酒屋の

真ー人が私と小三次を情こんそお前方い日中銚子の四
命狂方のまゝ分と堂羅アゝて立退のゝ わゝ方一
盃ゝ早く一盃呑んで逃ゝ せ人今も寄と人の寄を
きけばお方を追やて御勢をとゝて大勢を集
めて追やて来ゝ言ゝまゝ小三も私も青くなり中ゝのサ
旅のゝ方ゝ山方ハ二人の外不味方ハ一向ゝ所の
揚ゝと知ゝ如何ゝ大勢来ゝ日小ゝ叶ハゝ
夜通ー逃て帰ゝとあ怖ーて酒と呑で居ゝ宅

追懸て来るこゝろ風流さま夫〳〵おのおの酒の代を拂
つゝこゝを出ようとまるゝと酒屋で言ふハ和尚も高恵に
逃さ時山ヤア追懸ぶ和尚遠へ〳〵行て藪城
ふ二所ぢり行て方の松林をぬけて行とゝふ所へ
かゝりて西ろ方振すもゝ追懸ぶ人のハあらうまかう
ふハその系中へ行〳〵根ぶ出るゝ用心して行と藪人中さ
成イヤそつやヤ大事ぢ逃もゝ追懸ぶ坂
巻まるぢらゝ〳〵用道人かもゝ根ぶ居ると〳〵〳〵死東

と取り大手と会つぢのぢヤ〳〵成ゝ〳〵ぢまゝ山ヤ法のも
ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵十二法ヤヤ仕やせんぢ正直ハ元藤ぶ強
ゝのサ子成ヤ〳〵〳〵実ぶ〳〵ぢる筆〳〵そもゝ〳〵行根〳〵さ
その藪城ふ逃さの〳〵行根も論方ぶ〳〵ぢません仕
来と逃もゝ長根ぢで。大勢ぶ追懸ゝ〳〵居ても系と
通るゝ和い方ぶ〳〵藪の中と二ヶ所と欠ぬけて
杉の林と藪〳〵向へ出ると居〳〵〳〵野系へ出中さ逃
すると完早用ぶ〳〵〳〵と日中の根で逃と

あるく　ここいて
ゆくりあい後が淋しくなりて行所ともなりぬ物さびくなりて
何ども帰いるべがなりそよサよまうぶ小ぶ次ぐおし長変ぬ
なりて×「ヨウく」喧ることなく言なく言なくこそ成なりて先人おな
行て歩くなりなりぬぐ〜ぬぐ〜ぬ猿が背後ぬ跟て来さどやう
ぬ人なり〜〜「イヤモシそれうぐ」大変ぬ多ぬ潮〜〜ぬ糸を一里
ぬ海も来ると左右ぬ細い所がありて左巾の狭い所へかゝる
〜左りの方の表の外路よ猿が居ると二疋出て居るとなり
やはり変ぬ小ぬ私も途中へ来ぬ〜〜ぬ来ありて互ぬ

影絵ぬ人合せて暫時〜言て居ゆ〜〜小ぬ言ぬ猿
といふものの義公〜ゆ〜が後ぬくなりて使者乳なりのぐ〜ぬ理を
話て影ぬ出ぬ出ぬるとなりぬて哭ぬ〜ぬ知ぬて
斉後の方へ帰られなりて猿ぬ据まりて通らうと猿
極めて出ぬ〜〜帰ぬ〜ぬ私と小ぬと出ぬ方が逃迹を仕るい
猿ぬ多ぬと引合て猿の居る二ぬ多ぬの所まで行て居さ
所が月の光りと猿の眼の光りで戦争と先ぬ〜ぬ猿と
逃ぬ分れると思ひぬ〜〜二人なり〜〜ぬ所へ多紙

この文てかこがやまーこうあへる。エーイ猴さるかぶるへがとこうはまを
私どもい寛かぶ祝の病気で夜通しふ宅へ帰る者でこさい
ますを何卒お見退しー　こは成て此所とも通しー　こは
定めてあるこのお在あるおと　以前ふ接拶もせずふ
通ることは立腹でございませうが　何卒　祝番乃の所ふ
免しでお通しー　こは成腹ふと顔ひまーこうィヤ物るので
猴が咬つけこと云ふて　正銘と踊る娘と仕ーもふ
動ふ居ーーヤレ猴のおと　猴と屋めこがー

通りかゝりて行く看と石の物物が森の入口ふ並べて
在て森の中ふ何のこお宮がありまーこのサ　峯ーーこうやう
能落ー　咄しご立流る使客の二人が石の言麗物ふ並
べて　謂ーこ中が可笑アーーーー　茂ーーーー　小三さんの逃る
形を見てこうこナア　イヤ彼時の猴よ弱ーこうふこう
こーーーート立ふ笑ひ　謂合ひーが言葉ふ　此所ふ休こう
明朝ふ寅刻ふ起出て白河の宿人急ぐ打ーも　彼青
森の伯父ふ白河を我立ふーて白坂の方へ来ーる途中

盗賊の公合既に義の家中峯次郎が逆ひ行合を
きゝとゞ音妻の使客の乳性小三次捨ゝ郎ぶ傷を嘗て盗
人どもを進殺〳〵伯父を殺ひつゞかく錄金べ
帰りける

まゝ盗賊を殺ゆゞ本うべきを略しを
旅宿の雜談をうり峯次郎旅行の者
幼ゆ備〳〵則ち人情の用やうし

春色梅美婦祢卷之七